

メッセージアウトライン

ヨハネ11：28～44「ラザロの復活」

イエスによって信仰告白に導かれたマルタは、ベタニヤの自宅に戻って、妹のマリヤにそっと「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」(28)と言った。家でマリヤを慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急に立ち上がって外に出ていくので彼女が墓に泣きに行くのだろうと思って、彼女について行った。(31) 残念ながらここでもイエスはひっそりと行動することはできなかった。マリヤはイエスに会うと姉のマルタとまったく同じことばを言った。(32) まだマリヤはマルタがそうであったように、イエスが神の御子キリストであることをはっきりとは理解していない。彼女はイエスの足もとにひれ伏して泣き、いっしょに来たユダヤ人たちも泣いていた。(33) イエスはそれを見て「霊の憤りを覚え、心の動揺を感じ」られた。(33) イエスは彼らに同情し、また、親しかったラザロのことを思い、涙を流されたのである。(35) イエスは冷たい無感動な石のような心を持ったお方ではない。イエスは私たちの悩みや苦しみ、悲しみをよく理解し同情して涙まで流してくださいのお方なのである。このイエスの涙を見てユダヤ人たちは「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか」(36)と言った。しかしもう一方では、イエスも死に対しては無力なのではないかと考える人々もいた。→(37)

「そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた」。(38) これは単にユダヤ人たちの不信仰や陰口に憤りを覚えられたということではない。33節と同様、イエスはラザロの死によって悲しみに打ちのめされているマルタ、マリヤその他のユダヤ人たちを見て、人類最後の敵である死が彼らを、そしてこの世界を支配している現実を感じ取られたのである。イエスがこの世に来られた第一の目的は、この死を滅ぼして人々に永遠のいのちを与えるためであった。→ヨハネ3:16,10:28 今イエスはラザロの死という現実を前にして、その死を打ち破るための戦いに出て行く闘士として憤りをもって墓に向かわれたのである。ユダヤ人の墓はほら穴か岩をくりぬいた場所に作られ、その入り口には大きな石でふたをする形式のものであった。イエスは「その石を取りのけなさい」と言われたが、マルタは「主よ。もう臭くなっておりませう。四日になりますから」(39)と言った。マルタはここではもう人間の常識でものごとを考えるレベル

に戻っている。そのような彼女をイエスは諭される。(40) 彼女はただイエスを信じて単純にそのことばに従うべきであった。信仰の世界は常識でしぼることはできない。墓の入り口の石が取りのけられ、イエスは目を天に向けて祈られた。→(41~42) イエスと父なる神とは一つであり、父はいつもイエスの願いを聞いてくださっていた。しかし、わざわざ人々の前でこのように祈られたのは、それを見ている人々が父なる神がイエスをこの世に遣わされたことを信じるため、イエスこそ死を打ち破る力を持ったまことの救い主であるということを知ることによってであった。イエスは祈り終わると、大声で「ラザロよ。出て来なさい」と叫ばれた。(43) するとラザロは手と足と顔を布で巻かれたままで墓から出て来た。(44)これは事実であり、死さえもイエスのことばに抵抗することはできないのである。私たちもこの人類最後の敵である死をも打ち破る復活の力を持ったイエスを心から信じ従い、その恵みに生きる者となろう。